

日本教育学会 若手育成委員会報告

若手育成委員会委員長
油布佐和子（早稲田大学）

1. ワークショップの中止、そしてオンラインでの開催

100年に一度の危機といわれるコロナパンデミックは、本年度の若手育成委員会の活動に打撃と、そして可能性を与えた。

若手育成委員会では、当初、2020年度の活動として、前年に倣い、講師を招いたワークショップを構想していた。しかしながらそれは、突然のコロナ禍のために中止を余儀なくされることとなった。この時、参加申込者から、「残念だ」という声とともに「次の機会はいつなのか」という質問が数多く寄せられた。これを受けて、委員会内で開催の可能性を引き続き議論し、その結果、ZOOMを用いて、大会後にほぼ1週間の日程で、ワークショップの領域ごとに実施することに決定した。コロナの時代には、誰でも同じようなことを考えるらしく、ZOOMを通じてのミーティングはあつという間に普及しており、こうした形態に大会の頃には違和感がなくなっていたことも、この決定を後押しした。

実際のワークショップ「気鋭の研究者に学ぶ」は、以下のように実施された。

- 8月24日 14～16時 教育社会学領域 神田外国語大学 知念渉 講師
- 8月25日 10～12時 教育方法・教育課程領域 東京大学 浅井幸子 講師
- 8月25日 14～16時 教育哲学・教育思想史領域 広島大学 杉田哲崇 講師
- 8月26日 10～12時 比較教育領域 山梨大学 鴨川明子 講師
- 8月27日 10～12時 教育行政領域 日本大学 末富芳 講師
- 8月27日 14～16時 教育史領域 兵庫県立大学 池田雅則 講師

事前の参加申込者は40名を少し上回る数であったが、前日・当日にも飛び込み参加があり、複数領域に参加する人がいるなど、参加者の延べ人数は80名を上回った。また、いずれの講師も〈気鋭の研究者に聞く〉というタイトルの通り自らのキャリア形成上の課題や研究への思い、博士論文作成の取り組み、研究を続ける上でのスキルアップやモチベーション、ワークライフバランスの課題等々について率直に語ってくださったために、その後の、ディスカッションも時間をオーバーして続くなど、盛会であった。

google フォームを使って収集したアンケートでは、「(投稿論文を) 以前リジェクトされた経験からまたリジェクトされるかもしれないと思ってモチベーションが下がっていたのですが、先生の体験談を聞いてがんばろうと思えました」「実際の経験に基づく話には説得力があり、博士課程で自分が取り組むべきことについて考えやすくなった」「自身のキャリアをフランクにお話ししてくださったので、博士課程における目標設定に非常に役立ちました」など、参加者のエンパワメントに寄与したと思われる。また、「収集した史料の活かし方やフレームの作り方が勉強になった」「アカデミックスキルの向上や研究手法ワークショップのような議論の展開となり、今回もまたとても勉強になりました」などの感想も寄せられ、研究のヒントを得た参加者も多かったとみられる。

また、すべての領域に参加した数名からは、「研究領域を超えて、共通する点（フィールドワークを通して現場から学ぶということ）に気づかされ、同時に、差異も明確になり、とても貴重な時間となりました」「領域を横断した（もしくは複数の領域の）セッションが作られることにも今後期待したいと思いました」という感想が寄せられた。若手育成委員会は、各専門学会でも取り組まれているが、諸領域を包摂しかつ横断して、若手同士が交流し、また学ぶ機会は案外少ない。ここに、日本教育学会ならではの「若手育成」への貢献のカギがあるように思われた。

2. ワークショップの講師から

各講師にはワークショップの感想を依頼した。当日のワークショップの雰囲気が伝わるのではないかと

と思われる。講師の皆さんには、率直にそして誠実に対応していただき、委員会メンバーも学ばせていただく点が多く、あらためて感謝したい。

【教育社会学領域】

アドバイザー：知念涉（神田外国語大学）
若手育成委員会の依頼に基づき、何をきっかけに研究者を志したか、D論・査読論文作成の上の苦勞、初期勤務先決定までの苦勞などについて、話題提供を行った。その際、表の経歴には現れない裏の経歴(?)を明示しようと心がけた。すなわち、結果的に学術誌に掲載された論文が採用されるまでに何回査読に落ちたのか、就職するまでに大学の公募に何回不採用になったのか、プライベートにおけるライフイベント（結婚や子育て）が研究生活にどのような影響を与えたのか、研究業績等に加えてそういったことも明示しながら話題提供を行った。あえて裏の経歴を明示したのは、表に現れた経歴だけで語ると成功体験だけがいつつな形で伝わってしまって自分の研究生活の有り様がうまく伝わらないように思え、きつと若手研究者が求めていることも苦勞をどのように乗り越えたのかという話題だろうと考えたからである。

話題提供の後には、参加者から現在抱えている様々な苦悩や苦勞が語られた。例えば、査読を落ちた論文をどのように修正するべきか、仕事や子育てがある中で研究をどのように続けていけばよいのか、海外の大学院を修了し日本に戻ってきたが研究者ネットワークをどのように構築していけばよいのか、博士論文を出版するためには何にどのように取り組めばよいのか等である。それらに対して具体的で効果的な解決策を示すことはできなかったが、それでも参加者間でそれを共有し、どのように対処していくのかを話し合うことができたという点では、意義のある会になったと思っている。

会を通して感じたことは、孤立している若手研究者が少なくないのではないかということである。子育てや仕事をしながら大学院生活を送っていたり、海外の大学で学位をとって日本に戻ってきたりなど、大学院生のライフコースは多様化している。そうした状況のなかで、かつてであれば若手研究者同士のインフォーマルな関係性のなかで自然と伝達されてきた知（査読を落ちたことへの対

応など）を十分に得ることができていなかったり、ライフコースの違いにより互いに悩みを共有できなかったりすることが背景にあるのだろうと考えられる質問が多かったのである。

今回はコロナウイルス感染症への対応のためにオンライン開催となったが、それによって、むしろ参加できた者も少なかったはずだ。地方から参加している者、仕事や子育ての合間をぬって参加している者もいた。想定外の出来事によってやむなくオンライン開催となったが、意外にもそのメリットは大きかったように思う。他方、オンラインでは参加者同士の交流が難しく、新たなネットワークが構築されづらいという欠点もある（上述したように、若手研究者のライフコースが多様化しているために、このような会において似た悩みを持つ人同士がつながることは重要である）。今後は、対面開催を前提とすることなく、会の目的に応じて、対面/オンラインを模索するようにすればよいのではないだろうか。

【教育方法・教育課程領域】

アドバイザー：浅井幸子（東京大学）

2020年8月に、オンラインで開催された若手育成委員会のイベントで、自分の研究の履歴を話す機会を頂きました。それは私にとっては、自分の研究の関心がどのように展開してきたかを確認する貴重な機会となりました。しかしもう一方で、話をしながら、自分が大学院生だった時と、現在の大学院生が置かれている状況の違いの大きさに、自分の経験の何が聞き手にとって意味を持ちうるのかわからなくなっていました。私は院生の頃、1920年代の日本の新教育を対象として研究していたのですが、その研究がどのような意味を持つのか、研究のゴールは何なのかということはよくわからないまま、対象が語りかけてくることを言葉にしていました。関心も方法も曖昧な中で、探索的に研究し、時間をかけて形にしていくことが可能だったのです。そればかりでなく、博士課程に在籍していた時に、研究や仕事とは関係なく、1週から2週に1日は学校を訪問することができて

いました。時間に余裕があったのだと思います。

そのようなやり方が、当時の大学院の制度や文化によって支えられていたことが、今になってわかります。当時は経済的に、奨学金が支えになっていました。多くの院生が無利子で貸与を受けることができ、研究職や教育職は免除職になっていました。今は、学生への支援の「選択と集中」の結果、業績を急ぎ、優秀さを証明していないと、経済的な支援を得ることができません。働いている院生も多く、そのことが研究する時間も、教育や学問への関心から活動する時間も奪います。「選択と集中」による支援は、他の学問にも増して教育学にとって致命的です。教員養成と学校の支援を使命としている以上、すべての地域をカバーするかたちで多くの教育研究者が必要であることは明らかです。優秀な一握りがイノベーションをもたらせばいいという学問ではなく、先生や子どもたちとともに教育を探究し創造することのできる多くの研究者のネットワークによって支えられる必要があります。院生全体をカバーする支援を求めていく重要性を認識させられました。

【教育哲学・教育思想史領域】

アドバイザー：杉田哲崇（広島大学）

今回、教育哲学・教育思想史領域の講師として若手研究者ワークショップに登壇させていただきました。新型コロナウイルスの影響により、当初の予定から変更されオンラインでの実施となりましたが、多様な研究領域から参加者があり、私にとっては刺激的なワークショップとなりました。例年のない対応の中で、運営に尽力いただいた方々に感謝申し上げます。

ワークショップではD論・査読論文作成上の苦労や院生時代の反省、初期勤務先での苦労、研究者生活の実際など、私の「お悩み相談」のような内容になってしまいましたが、一人の研究者の拙い歩みを示すことが、これからの研究者にとって参考になっていればと願っています。当日は、質問を受ける中で自分が意識できていなかったり、明確にできていなかったりする研究の位置づけや研究方法・観点の意義と限界を痛感することが多く、自分自身も「若手」研究者として磨いていく部分がたくさんあることを教えてもらいました。

ワークショップでは、大学院生時代の留学や大学教員になった後のサバティカルの話題がありました。私自身は留学経験がなく、これからの課題なのですが、留学の意義や目の前の成果にとらわれないことなく研究する時間を確保することの大切さについて、コーディネーターの先生からも体験が語られました。研究者キャリアを思い描くとき、若手・中堅・ベテランといった多様な世代の交流できる場があることは、有意義なことだと感じました。

また、学際的な研究や歴史研究の意義など、研究方法や対象、姿勢についての質問もありました。社会の流動化による研究課題の複雑化や研究者ネットワーク構築の広がりなどから研究テーマや人間関係の幅を大きくしていくことが求められがちで、とくに教育哲学・教育思想史では対象となる思想家やテキストの時代や文脈にじっくりと向き合うことも求められます。そのなかで自分の研究をどのように位置づければよいのか、ということが問題意識として共有されました。おそらくそれぞれが置かれたキャリア段階や博士論文を書き終えているか否かなどに応じて、力点の置く場所が変わってくるのでしょうか。それでも当日お話ししたように、私自身の経験を振り返れば、（とくに地方大学の大学院生にとっては）多様な専門領域の研究者や最先端を切り開く研究者との交流を持つておくことは、研究の広がりや深まりをもたらしてくれると思います。

その意味では、今回のオンライン形式でのワークショップには多くの可能性があると感じました。おそらく読書会や研究会などは、それぞれの大学や地域の集まりの中で実施されており、それはそれで重要な研究の場を形成しているのでしょうか。他方で、そうした研究の場がオンラインでつながれば、これまでは参加ができなかった（とりわけ地方の）若手研究者も研究者ネットワークに加わることができるようになるかもしれません。そうした場を学会としてつくっていくとよいのではないのでしょうか。その際、どのようなかたちで場をつくるのか。学会として検討すべき課題を設定して研究者ネットワークを組織することもよいかもしれませんし、萌芽的な研究を持ち寄り、交流し合う場を設定するのもよいかもしれません。今回の講師経験からすれば、啓蒙の場であるよりも、古参者と新参者がともに探求活動をする開かれた

徒弟的学習が生じる場になると、単なる若手育成の場ではなく、自称「若手」教員も含めた研究者同士のネットワークができていくのではないかと期待しています。

【比較教育領域】

アドバイザー：鴨川明子（山梨大学）

昨年度の若手交流ワークショップに引き続き、比較教育学領域の講師を務めました。オンライン開催ということも手伝って、比較教育学領域への参加者は18名と多くの方にご参加いただきました。その内訳は、博士課程の院生（留学生も若干名）、任期付き助教の方や任期のない職に就かれている方など、一口に「若手」といっても様々な立場の方が参加なさっていました。また、参加者の研究対象地域は、北米、南米、ヨーロッパ、アジア、アフリカなど多岐に渡っています。比較教育学を冠するゼミに所属する（した）方は若干名いらっしゃいました。

前半の講義では、私から以下の点をお話しました。

- ①アカデミック・キャリアの紹介
- ②D論までの道のり
 - ・何をきっかけに研究者を志したか
 - ・なぜ、マレーシアか
 - ・博論テーマを焦点化したいきさつ
 - ・論文を作成したときに直面した課題・問題
- ③国際学会への参加・研究発表
 - ・比較教育学を学ぶ人に求められるちからのレーダーチャート
- ④初職とウェルビーイング
 - ・研究生活を支えた、財政的基盤等
 - ・初職を獲得するために努力したこと
 - ・研究者のウェルビーイング—子育てとしごとの両立は可能？
 - ・海外のフィールドに行かないでできることは何だろう？
- ⑤まだ途上にある方へのアドバイス

後半部の質疑応答やディスカッションから、幾つかの論点をご紹介します。

- ①博士課程の院生から、「記述の先の分析を見越して、メソドロジーをつめてからフィールドに

行くのがよいのか、その逆か」という質問が出ました。博論執筆の前に生じる疑問かと思えます。特に、フィールドに行くのが難しい現況にあっては、フィールドの前段階である文献調査等に丁寧な時間をかけてはどうかとお答えしました。

- ②留学生（院生）から、多様なネットワーク（日本、対象国・地域、理論的に先導する国や地域）をつくる重要性と具体的なつくり方への質問があり、油布佐和子若手育成委員会委員長（早稲田大）が、興味関心ある科研プロジェクトの代表者にアプローチするとよいのではという具体的なアイデアを教えてくださいました。
- ③就職に関わり様々な思いや悩み・迷いを口にされる方は非常に多くおられました。たとえば、「フィールド（国・地域）の選び方と就職先への影響」「実務とアカデミアへの就職」「初職からセカンドキャリアへのリンク」「博論と就職活動の優先順位」などが話題に挙がりました。
- ④既に職に就いており、セカンドキャリアへの関心がある方からは、「比較教育学の特性や強みは何か」という問題提起があり、前半の講義で示した「比較教育学を学ぶ人に求められる力のレーダーチャート」をもとに、コロナ禍の現況にあっては調査能力以上に政策・制度分析、文献研究、歴史分析などの力が求められるのでは、とお答えしました（①とも関わりますが）。
- ⑤油布委員長から、厳密に比較する研究は少ない中で、「比較って何だろう？」という疑問が投げかけられました。この問題提起に対して、参加者のお一人が比較教育学の「ハイブリッド性」に言及していました。つまり、教育を学校の営みのみに閉じ込めず、政治、経済、社会、文化と多様な分野から分析する必要性や、教育段階も幼児教育から高等教育、成人教育や生涯学習など長きにわたること、対象とする国や地域もキャリアを経るにつれて広がっていくことなどの重要性に対する言及ではないかと思えます。比較教育学の特性を挙げるとすればフィールドに基づく研究ということが言われがちですが、コロナ禍でフィールドに行くことができなくなったら、比較教育学らしさが失われるというのであれば寂しい限りです。こういう時期だからこそ、比較教育学の本質に立ち返ることができればよいのではという意見が挙がりました。

⑥比較教育学らしさや比較教育学の本質を考える上で、「若手支援企画のファン」を自認し、すべての領域のセッションに参加してこられた鈴木悠太先生（東工大）からいただいた言葉はヒントになりそうです。鈴木先生は、「他者に開かれた研究知性」と表現なさいました。これは講師を務めた私を形容する言葉というよりは、比較教育学が持つ知性を形容する表現のように思えます。

昨年度に続き講師を務める機会をいただきました。これまで、諸学会の若手育成企画の日程が長期休業期間中に重なりがちで旅費もかかるため参加が難しいという声を聞くことが少なくなかったのですが、オンライン開催の利点を生かして、多くの方に気軽に参加いただけたことを非常に嬉しく思います。一方で、オンライン開催ゆえに名刺交換したり、交流したりというとりわけ若手の方同士の「つながり」を持つという意味では工夫が必要にも感じました。私自身、終了後に参加者の方々から熱のこもったメールをいただき大いに励まされたのですが、若手の方同士が、こうした交流会を通じてつながりを持っていくためのアイデアを練りたいと思いました。

最後になりましたが、オンラインという新しい形での若手交流会を企画運営して下さった油布委員長、当日支援して下さった木村康彦委員をはじめ、若手育成委員会の先生方に感謝申し上げます。

【教育行政領域】

アドバイザー：末富 芳（日本大学）

研究者としてのリサーチ・ヒストリーを発信することは、良い経験であり、このような機会を与えていただいた日本教育学会若手育成委員会・委員長・油布佐和子先生および司会をおつとめいただいた元兼正浩先生にまず感謝申し上げます。

京都大学教育学部や教育行政学ゼミでは、分野横断的に学ぶ“自由の学風”の中で、闊達に学び活動してきた私のリサーチ・ヒストリーが若い世代のみなさんの研究活動に資するものであったのかはわかりませんが、あらためて教育行政学や教育経営学を専門とする研究者の重要性を認識する

重要な機会となりました。

とくに研究者としてだけではなく、「積極的な政策エージェント」としてアクティビスト活動を展開するに際し、法令だけでなく教育委員会や学校をシステムティックに把握し分析することのできるアドバンテージが教育行政学・教育経営学の研究者にはあることも、この機会でのリフレクションとともに理解しました。

それだけでなく、ともすれば多くの理念で膨れ上がってしまう教育政策の中で、教育の機会均等や、子ども、教員や保護者の権利、公正（Equity）などのゆるがせにはならない規範と向き合ってきた学問として、いまこの社会に対し果たすべき責務は重みを増しているように思われます。

あらためてこの取り組みを振り返ると、研究者個人のリサーチ・ヒストリーをどのように研究者コミュニティの育成につなげていくかという点が、次のアカデミアの進化のありかたのように思われます。

コロナ禍の中で、オンライン開催ということになりましたが、今後はオンラインと対面のハイブリッド型の学会・研究会活動が、当たり前になっていく時代の中で、これまで距離と時間の壁にはばまれていた研究者同士のコミュニティ形成が容易になっていきます。

この際に、たとえば私の場合ですと、教育財政に関わる若手中堅研究者の専門性をより高めるためのコミュニティづくりに、こうしたワークショップの機会をつなげていくのかを、テーマとした活動が必要であるように思います。

年長世代には学会分立などの「大きな」アクションに奔る傾向も認められなくはありません。

私が描くコミュニティは、もっと日常的でフランクにコミュニケーションできる“居場所”です。必ずしもフォーマルでなくても良いのではないのでしょうか。いままでは出身大学・大学院や地理的近接性などの小規模なコミュニティであったものが、オンライン上ではもっと伸びやかなつながりをつくるのが可能です。

若い世代の研究者も決して多くはない中で、ひとりの研究者が複数の専門的テーマをオペレートできるように、また年長世代も若い研究者たちの問題意識や手法に学べるように。そのようなコミュニティ形成のあり方を、世代を越えて考え実践してみることもまた、教育学研究の進化を促すも

のかもしれませんが。

教育システムのフロンティアに着眼し、切り開いてきた研究者として最後に申しあげたいのは、こうしたコミュニティは私たちがいま考えているよりもはるかに大きく広いものになるだろうということです。

若い世代の研究者だけでなくどの世代の研究者も、いままさに新しい次元に移行しつつある教育の世界に、曇りなき眼で向き合うべき時代が来ている、私はそう考えいまを生きています。

【教育史領域】

アドバイザー：池田雅則（兵庫県立大学）

教育史領域のワークショップは、8月28日の14時から2時間余りにわたって実施された。参加者は、演者、コーディネーターを含めて10名であった。演者は近世末から明治期を主たる対象とする日本教育史の研究者である。依頼を受けた当初は、学会誌に掲載された自身の論文を題材にしながら、教育史における先行研究批判、史料の扱い方や議論の展開の方法について具体的に紹介することを考えていた。しかしながら、参加予定の方々の関心や対象が多岐にわたっていること、全てのワークショップに申し込んでいる方もいることを知った。ゆえに、当初の計画を変更して、方法論だけでなく、自身のキャリア形成と業績について、進路選択や生活面も含めて幅広く紹介することにした。

ワークショップでは、前半において演者からスライド発表を行い、後半ではそれぞれの方からのコメントや質問に返答していった。発表は「研究史について」「外部資金の獲得について」「遠隔地・教職課程への異動と生活」という構成とした。

「研究史について」では、演者が取り組むべき研究を決める際に考慮してきた4つの観点を紹介した。何より大切なのは「やりたいこと」、次には「できること」、その次には研究遂行者として自身が「最適者であること」、そして「やらなければならないこと」である。「やりたいこと」は、人生経験の蓄積や日々の発見や違和感、興味から生じる。喜びに満ちた楽しい研究者人生を送るための原動力として、演者にとっては最も大切な観

点である。「できること」「最適者であること」「やらなければならないこと」は、研究者コミュニティで認められる実績を積むためだけでなく、教育研究職として採用される、そして認められつづけるために必要な判断基準である（雇用されない在り方は、なかなか難しい）。演者は日々思い浮かぶ「やりたいこと」リストの範囲から、その時々状況に即しながら、取り組むべき研究を選んできた。発表では、発見した史料（日記）や事例（近代私塾）に記録された、学校中心の教育史では記述されない人々の学びに惹きつけられたことが研究を始めるきっかけであったこと、その魅力を知らない査読者に伝えていく上で、教育史の研究史に自身や史料の存在を積極的に位置づけていくことに苦勞したことを述べた。また、就職に直結する業績づくりを重ねていくための工夫について述べた。

「遠隔地・教職課程への異動と生活」では、出身地や出身大学院から離れた地、教育学者がほぼ存在しない学部の教職課程に職を得た演者のことを例にしながら、教育研究職のキャリアの積み重ね方について紹介した。

参加者からは、研究に関して、初発の興味関心をどのように研究に落とし込んでいくかという課題設定についての質問、史料間の矛盾をどのように解釈・処理すればよいかという方法論についての質問があった。教育研究職として生活に関しては、遠隔地からの出張、史料探索に関するコメントがあった。また、教育研究職としての時間のやりくりについても話題が展開していった。

「コロナ禍」のために遠隔のみでの開催となったが、変転する状況の中でもワークショップの開催を実現していただいたコーディネーターの皆様には感謝申し上げたい。今回は海外からの参加者もあり、「コロナ後」の学会の積極的な可能性も感じられた。そして今回のワークショップは、研究者として重ねてきた自身の20年近い年月を振り返る貴重な機会となった。これまで研究を実践する中で、喜びも悔しさも、怒りも恥も、勘違いも発見も重ねてきた。これからの研究を担う方々のために、できるだけ包み隠さずにお伝えしたつもりである。少しでも参考にしていただけたのであれば、望外の喜びである。

3. オンラインでのワークショップの可能性と課題

オンラインでのワークショップという初めての試みが、参加者に大変好評であったことに、心から安堵している。

今回は海外から、日本と同じく stay home の最中にある複数の若手研究者が参加していた。COVID-19は国境を越えて人々の活動を制限しているが、web ミーティングはさらにそれを超えて人々を結び付けた。「コロナ禍で外出がままならない状況の中で、オンラインのワークショップが開催され、非常に助かりました。今後も、家庭の事情や金銭的な面で県外に行くのが難しいなどの理由で、オンラインでの学習会が開かれると助かります。次回の若手交流会では、講義だけではなく、若手研究者同士が自由に話せるような時間があると嬉しいです」という参加者の記述にも見るように、地方に住んでいる多くの若手研究者も、また子育てなどでなかなか自宅を離れることができない研究者も、スケジュールさえうまく調整できれば、様々な活動に参加できる見通しがあることが示された点が、大きな収穫であったと思われる。前年度実施したような全体会とセッションとの行き来といった方法は、今回は採らなかったが、やり方によってはブレイクアウトルームなどを用いて、それも可能なのではないかと思われる。参加者の中で、こうした技術的なアドバイスを書いてくださった方もいた。

一方で、対面の場合は、終了後に名刺の交換をして立ち話で交流を深めたり、「じゃあ、ご飯でも」というようなネクストサブセッションが開かれる機会も多いが、それは難しく、この点、複数の参加者から「残念だ」という声が寄せられている。web 会議に皆が慣れてくれば、多数の参加者の一部に声をかけて、さらに別の web 会議を続けるということもできるのかもしれないが、そうした〈作法〉はまだ生まれていない。対面時に行えたような web 会議後の個別ミーティングの可能性はまだこれからであろう。

内容的な面では、今回は気鋭の研究者にキャリア形成や資料収集・フィールドワーク、博士論文作成等々、多彩な領域でお話しいただき、それは好評ではあったものの、事後に取ったアンケートにみるように、「研究手法ワークショップ」「諸企画を通じたアカデ

表：ワークショップに望む内容

研究手法ワークショップ	33
諸企画を通じたアカデミックスキルの向上	30
海外の研究動向に関するワークショップ	29
キャリアの築き方（女性会員のキャリアを含む）	27
国際学会参加の手ほどき	20
若手学会賞の創設等によるステップアップ資源の提供	16
著名な研究者による討論集会	14
計	169

ミックススキルの向上」などは、多くの参加者が、それを望むと回答しており、こうした機会をさらに設けることができれば、若手育成委員会の活動もより活性化するのではと思われる。また、研究者を志す若い人たちの環境も刻々と変わっていることから、テーマのニーズ調査は随時必要だと思われる。

若手育成委員会を立ち上げ積極的に活動を促進してきた前本田委員長の後を引き継ぎ、何とか若手同士の交流や、研究者キャリアの展望につながる活動を実施してきたが、できたことはさほど多くない。また、若手育成のワークショップの録画等について、公開を考えて収集したが、それを公開するところまでに至らず、次委員会に引き継ぐことになった。次委員会では、ぜひこうした材料を有効に利用して、若手研究者育成に役立てていただければと願っている。

最後に、若手育成委員会の各委員、とりわけ、木村康彦さん（千葉大学）、藤本啓寛さん（早稲田大学）、渡邊真之さん（東京大学）の若手の委員の皆さんは、ワークショップの運営だけでなく、web 技術・google フォームなどを用いた活動のヒントをたくさん出していただき、また実際にそれを用いて資料を作成・保管するなど、労をいとわずに活躍してくれた。心から感謝したい。

（早稲田大学 油布佐和子）